太平洋「魔術」戦争

盆次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
太平洋「魔術」戦争

【Ｎコード】
Ｎ２００１ＢＡ

【作者名】
盆次郎

【あらすじ】
日本の女子大生　斉藤深雪　は交通事故に遭ってしまい、気が付けば病院のベッド。
やれやれ助かったかと思っていたらそこは７０年前、１９４１年でしかも「魔法」何て物が存在する異世界ともつかぬところだった！！
太平洋戦争と同じ時代・地理だけれど「魔法」が実在するへんてこな（？）架空戦記？ファンタジー？のつもり（どっちやねん！）
…初めてのド下手ですが頑張ります。

プロローグ　（前書き）

初投稿。皆様の秀作読んでて勢いで書いてしまいました…頑張ります。

プロローグ

斉藤深雪　１８歳。
今年の春に高校を卒業し、福岡の大学に進学した彼女は。

「これでもかーー！！！！！」

今、戦いの真っ最中であった。

「姉貴。姉貴の荷造り能力のなさは分かり切ってるんだから諦めなよ」
ばっさりと彼女の奮戦を総括したのは　斉藤実。

「姉貴の家事能力のなさは常軌を逸してるし、後かたづけに苦労するのはこっちなんだから。さっさとどいてくれ！！」言葉の二の大刀で姉を斬り捨てる愛すべき弟である。

「うるさい！！女の子の荷物には見られちゃマズいモンがあるって知っとろーがっ！！」
「……いや、姉貴。そう言って最後は俺に泣きついて幾星霜って感じなんだが？」
「うっ」

「それに姉貴の下着なんて色気もクソもねーのばっかだし」
「ひどっ！」
「否定できるんか？」
「うううう…」
「分かったら退け。あとは俺がやる」
「…ハィ…」
この弟、勉強の方では姉に全く適わない。それこそ足下にも何とやら。
姉、深雪は高校時代、成績は常にトップ3、女子剣道部の主将も務めて、絶大な人気を同姓からも集めていた、文字通りの才色兼備。
ちなみに大学でも現在進行形。詳しい内容は筆者の精神衛生並びに本人に自覚がないので省略。
まあさほど百合ではないので問題ないと言っても良い。
では何故書いたのか、それは謎である。

そんな姉の唯一最大にして壊滅的な弱点こそ「家事全般」なのである。
「全般なので唯一とは言わない」とは彼女の弟の至極最もな言葉であり、
お約束のようにこの発言の直後に吹き飛ばされた。南無。
その腕前たるや
「物探し＝発掘調査」彼女の部屋は別名『床が見えない魔窟』である

「掃除＝ダンジョン」彼女の部屋は掃除するのに覚悟がいるのだ

「料理＝地獄の釜」彼女の料理は神をも殺す
という具合である。

決して誇張ではない。
調理実習で硫化水素を発生させ、呼び出しを食らった女子高生は世界広しと言っても彼女くらいなものであろう。と、言うより居たら困る。

対する弟、斉藤実の方は…容姿そこそこ、成績そこそこな高校1年生帰宅部である。

ちなみに「授業・HR終了後速やかに帰る」学生を「強化系帰宅部」というそうな。
それで行くと彼は「超強化系帰宅部」にカテゴライズされる。

何せ教師に見つからなければ「終了後、全速力で走って帰る」からである。

理由は姉が帰ってくると何だかんだで時間が潰れる（姉の無自覚の破壊活動から家を守る）のでそうしないと自分の時間が作れないからである。

普通その様な境遇ならば「偉大な」姉の存在に鬱屈した性格になる

危険もあっただろう。
（「偉大な」とは件の姉自身がのたもうた発言。）
しかし彼には唯一最大最強の「家事スキル」があった。
なぜそうなったかというと。

姉弟の母親が家事を教えていると、本来教わらねばならぬ姉はいつの間にか飽きて逃亡。
弟が残ってまじめに聞いているのが常、普通（デフォルト）であったためである。
娘を淑女、大和撫子のように育てたいと切に願う母は、最初は文字通り「引きずって」でも深雪に家事を教えようとしたが、逃亡が3桁（くどいが誇張ではない）に迫った段階で諦めた。
こんな訳で「才色兼備だけど家事壊滅な姉」と「平凡にして非凡な家事スキル」という世にも不思議な、なんかもの凄く、世間一般から見れば「逆だろ！！？？」という感じの姉弟ができあがったのである。

閑話休題

姉弟はこの夏休みの家族旅行の準備をしていた。
これは姉弟の合格祝いとして計画されたものであり、父親の仕事の都合でもともと春休みに実施される予定が延びて夏になっていた。
姉弟に不満はない。二人とも自分の父親が優良企業の管理職で年がら年中世界中を飛び回っている事をしっていたし、そのお陰で何不

自由なく過ごせている事をわきまえていたから。
とは言っても久方ぶりの家族旅行である。弥が上にもテンションは上がり、８月の旅行なのに早くも準備に余念がない。
……姉の方は完全なる空回りであったが。
空回りした気合いは一回転して「グレムリンの襲撃かっ！」という荷詰(さんじょう)めになり、
そのツケは弟に１００％濃縮還元される。
具体的には後片づけと書いて「地獄」になる。
それを知ってるからこその冒頭の遣り取りであり、弟による姉の強制排除であった。
ちなみに小学生の頃からの日常(デフォルト)であったりする。その間、姉の欠点は解消されるどころか強化されて今に至る。

「あ。そー言えば今日母さん遅いんだっけ？」
「ああ。だから今晩の飯は俺が作るよ」
「やったー！姉さんカレーが良いな～」
「はいはい。」

姉弟の母親は時々帰りが遅いのでこういう自体は間々ある。
当然その場合の夕飯作りは弟に一任されている。
深雪の料理は「食べれるモノを作る」というレベルではない。
なので貴之が作るのは「家を破壊されないため」という理由からである。

「じゃあ買い物行くか。姉貴来る？」
「ん。行く行く～」
姉弟は買い物へ出かける。

その行動が運命を狂わせるとは知らず。

夕刻。
姉弟は買い物に出かけた。
深雪は自宅通学の大学生であったし、高校生の実は言わずもがなだ。

そんな訳で母親の返りが遅い時、二人は良く一緒に買い物に出かけた。
買う物を吟味し、支払うのは弟。荷物を持つのは姉である。

二人の性格を知るものならば当然の事であろう。

「こう言うのって普通男が荷物持ちじゃない？」と姉の方は不満があるようだが。

「姉貴の家事能力のなさは普通じゃないし、買い物選ばせるとまともに吟味できないし、あまつさえ安売りとか甘いモノに釣られるしあとは…」
「ストーーップ！！！！！　分かった、分かりました、分かりましたよ！！」

弟の発言を遮りやけ気味に叫ぶ姉。
否定する要素が全くないのでこうするしかなかったのであろう。自業自得。

「分かれば宜しいのだ。分かれば」
「うぅ…やっぱり間違ってる気がする」

「自業自得だろうが」
「…否定できません」

いつもと変わらぬ役割分担、いつもと変わらぬ遣り取り。

……
ここまでは何も変わらぬ日常であった。

２０１１年７月１８日
午後９時のニュース

「本日午後６時頃　北九州市八幡東区〇〇の交差点で車数台が絡む事故が発生しました。
この事故で男女７名が死傷し、このうち交差点で信号待ちをしていた男女２名が意識不明の重態です。
警察が２人の身元を調べると共に事故の詳しい内容、原因などを現在捜査しています。

続いてのニュースです。
本日小倉駅で……」

プロローグ　（後書き）

こんな感じですが頑張ります。
感想など頂けたら感激です。

プロローグ1941

『状…は？』
『……治療は……きました。今は……ます』

どこか遠くで声が聞こえる
そう認識が追いつくと、体は動かせないながら深雪の意識が覚醒する。

『後遺症……大丈夫か？』
『……擦り傷程度でしたので…ただ、頭を……打ったので…』

『危険があるのか！？』
『いえ、打ったと言っても瘤程度です。ひびも入ってないと思われます』

『良かった…』
『とは言っても頭部を打っております。なので経過を注意して見ております。』

『大事な部下だ。宜しく頼む』

はて？
自分に上司なんて言う存在が居ただろうか？というか治療？
脳内を埋め尽くすクエスチョンマーク。

それらを処理する事で自分のみに何があったのか、徐々に判明してくる。

（そっか…実と買い物に出て…あの交差点…光…はねられたんだろうなあ。で、病院に運ばれて治療を受けたと。うんうん、毎度ながら運が強いねえ）

剣道をしているのとは関係はないが、彼女は幼い頃から生傷の絶えない子供であった。
喧嘩上等！と言った感じだったので打撲程度なら結構な回数経験している。
で、毎度毎度関係者（せんとうさんかしゃ）の中で一番軽傷ですむジンクスがあった。
なので頭を打つくらいどうと言う事ない筈だが、今回はやけに体が動かない。頭はほぼ覚醒してるので実質金縛り状態である。
これが交通事故というモノなのかな～と鷹揚に構えていた（実際は病室で寝ている）彼女だがそこでふと気がつく
（実（みのる）は！？あの愚弟はどうしたっ！！？？）

この女性、家事という本来女が勝つべき（と本人が思っている）分野で適わないせいか、総じて識域下での弟の扱いが荒い。こんな状況でも愚弟呼ばわりである。

ともあれ弟の安否が分からないとあってはオチオチ寝ても居られない。
覚醒した意識で無理矢理体を起動させようとする。すると何かが頬を撫でるような感覚の後、彼女の瞼がパチッと開いた。

「……んぇ？」

意外にもあっさりと解けた金縛りに拍子抜けした声を出す。
が、ほぼ同時に先ほど以上のクエスチョンマークと違和感が押し寄せてくる。

（ここどこ？これ誰？つかなんじゃこりゃ？？？？？）

先程述べたように彼女は病院と縁が深い。
縁が深いと書いて「常連客」と読む。その心は？

（知るかんなもんっ！！間違いなくいつもの病院じゃないし、服装からしておかしい！）

彼女の視界に入ってくるのはベッドの上から此方を除く女性2名
一人は看護婦らしいのだが…古い。
昭和かよっ！と突っ込みたくなる格好である。
もう一人は自衛隊のような服装。
此方は親戚に一人自衛官がいた関係で分かる。だがなにか違うような気もする。

深雪が混乱している間に彼女の意識回復に気がついた2人が声をかけてくる。
「斉藤？大丈夫か？」
「斉藤さん？大丈夫ですか？」

自分の事を呼んでいるのは分かる。こっち見てるし「斉藤」と読んでいるし。
自分の事を心配しているらしい2人に深雪は答える。

神様は言いました、「嘘をついてはいけない」と。
なので深雪は正直に言った。このあと何が起こってしまうのかも考えず。

「どちらさまですか？」

瞬間、世界が凍り付く音が聞こえた気がした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「つ、疲れた…」

うっかり発言「どちら様ですか」の結果がこれだ。
全然大丈夫だというのに2人は取り合わず、「「記憶喪失か！！？？」」と大騒ぎ。お陰でさんざん問診やらなにやらを実施され。
深雪は疲れ切っていた。

しかし。
才色兼備を持って知られる彼女は現状を正しく認識していた。

「ここは普通の世界じゃない」と。

なぜならば
ＣＴスキャンやＭＲＩはないのに医者が手を深雪にかざすとそれとそっくりな画像が壁に投影された。（ただし医者が手を下ろすとすぐに消えた）
さらにはライト代わりに指の先に明かりをともした。

深雪は仰天したがさもありなん。

しかしその様子を見た3名はさらに驚いていた。
「忘れたのか？」と。

よく分からないがどうもそう言う事がまかり通るのがこの世界のようである。
となるとここは異世界で、科学技術以外の何かがあるのであろう。

早速上司殿が対処にかかる。
深雪としてはいい迷惑の気もするが、現状が分からない以上、逆らわず上手く対応するのが得策と考えられた。

「…さて、早速だが…　私の名前は八田楓。君の上官で現在は海軍に出向している…んだが…覚えているか？」

「…すいません。」

「…自分の名前は分かっているんだな？」
昼間の検診のとき話したりして分かっていたのである。

「ええ。斉藤深雪１８歳　…ただ…それ以外がごちゃごちゃというか変わってるというか…」

そう、名前と年齢は変わっていなかった。ただし
「生年が大正１２年になっていました…」

「ん？何の不思議も無いだろう。今は昭和１６年なのだから……何というか、君の記憶喪失は複雑奇怪だな…ああいや、悪く言ってる訳ではないぞ本当に、」

そうなのであった。昼間の検診で分かってしまった事。
周囲の風景や服装などで厭な予感はしていたのだが。深雪は昭和に来てしまっていた。
それを聞いて深雪はお約束通り「きゅぅ…」とブラックアウトしたが

昼間に検査結果に周囲は首を傾げていた。
元の記憶も完璧なため、一般常識、学問に関しては問題ない。
さらに出来事に関する記憶も完璧。たとえば支那事変とか

なのに、周囲の人に関する記憶がごっそり抜けていると、上司殿達は見ていた。
少なくとも単純な記憶喪失であるか甚だ疑問の残る結果となった。

深雪からすれば歴史の授業とゲームで得た「歴史事実」が通用したに過ぎない。
それだけなら異世界ではなく昭和へのタイムスリップなのだが……

如何せん昼間の超常現象のインパクトが強すぎ、現状が良く飲み込めない深雪である。
周囲は見慣れたはずの周囲をきょろきょろおどおどしながら見るその様子を見て記憶喪失を確信したとか。

「斉藤深雪」という名前は変わっていないのが逆に不気味である。
悪い冗談と思いたいがそうではないらしい。
痛みはあるわ吐き気はするわ、諸々の状態がここが現実(リアル)である事を示している。

弟(みのる)の事も気になるが、今はそれどころではない。
深雪は眩暈がしっぱなしで今にも倒れそうな幻覚に見舞われながらも辛うじて聞く

「貴方…は私の上司で、私は部下で…海軍に出向？という事でしょうか？」

「…うん…完全に忘れているか……」
「すいません」
「いや、いい。気にするな。取りあえずこのままじゃ君は何も出来ないだろう。

まず、私は八田楓。現在呉鎮守府付きの海軍特務班で班長をしている。君はそこの班員……なんだが…忘れているんだよな…」

「はい。…すいません」

「はぁ…まあ良い。本来ならば君は予備役なりして一時にしても療養して貰う所なんだが…今はそうも言っていられない。必要事項を再教育するからしっかり覚えろ。
と、いうか思い出せ。」

「は、はぁ…」
「返事はシャキッとせんか！！！！！！！」
「は、はいっ！！！」

「宜しい。では始めよう」

楓班長の有難いと言うには教育的指導のきいた長―いお話は夜半に及んだ。
分かった事は

・斉藤深雪は八田楓率いる海軍特務班に所属し、現在川崎にある。
・「八田班」と呼称されるその班は班長八田楓以下女性６名からなる。残り４名は現在別の用事中。
・「八田班」は海軍に属するが特殊技能により艦長ないし司令官直

属となる。現在は川崎で艤装中の航母に乗り込む予定である。

「待ってください。特殊技能って何ですか？」

「特殊技能まで忘れたか……そうだな、私たちの存在意義そのものと言ってもいい」

「…なんですか。それは」

楓は告げる。

これが単なるタイムスリップではないことを示す決定的な宣告を。

「『術』とも言う。いわゆる超常現象などを発生させる、使い方で一つで毒にもなる恐ろしい力だ。

海外では『マジック』『魔術』とも言うな。我々はそれを使いこなす特務班。

斉藤深雪　君はそこの一員なんだよ」

証拠とばかりに楓は指先に明かりをともす。

夜闇に浮かぶ幻想的なそれを見ながら

（は、はは、ははははは　超展開すぎでしょ…」

深雪の意識は断絶した。

夢の中で何か不思議なモノを見た気がしたのだが、翌朝の騒動もあって完全に忘れてしまうことになる。

１９４１年（昭和１６年）　７月１８日

斉藤深雪の数奇な太平洋戦記が、始まる。

「深雪？深雪――――！！！！！！！！！！」

上官殿の叫びが夜に響いた。

プロローグ１９４１（後書き）

ご都合主義が続くかも知れません…

初顔合わせ　（前書き）

早く実戦というか本番に入りたいんですが…
もうしばらくご辛抱ください。本当にスイマセン。

初顔合わせ

翌朝

「えと…皆さんおはようございます？」

深雪の朝の挨拶が微妙な感じなのは周囲にいる女性5名が原因である。

うち1名は知っている。楓だ。

上司…いや、海軍らしいから上官か。彼女が他の班員に事情を説明し、招集したらしい。

同僚と集まって何かすれば少しは記憶の回復に繋がるのではないかとの希望を持って。

だが、残念ながら、集まってくれた残り4名には全く見覚えがない。ただ全員同じ軍服姿で楓の右にずらっと並んでいるところ、深雪を心配そうに見ているところを見ると…

（私の同僚なんだろうなあ…全員顔も知らん人ばっかだよ……）

記憶喪失と見られているため各々自己紹介と深雪との関係を話してくれる。

東堂恵理

楓の部下、深雪の同僚。
班では副班長。「念話」を使用して班の取りまとめをするのにこのポストだとのこと。

「念話って何ですか？」

この質問は予想されていたのか昨日ほど驚愕されない。とはいっても全員の顔がこわばったのは事実。
深雪はそれを見て　（あ…ミスった？）と思った。

　この娘、賢い。

本人は知り得ない事だが、「治癒」「念話」「斬撃」は威力、精度はともかく初歩中の初歩なのである。故に面と向かって話しているこの距離ならばたやすい筈なのである。

『これですよ、聞こえてますか？
聞こえたなら頭の中で会話する感覚で返信をやってみてくださいな。
』

突然脳内に響く声にさらに驚愕した。
みると恵理がニコニコして此方を見ている。

『ええっと…恵理…さん？』
『はい。そうです。これが念話です。…良かったぁ。出来なくなった訳じゃないんですね…本当に…良かった…ぐすっ』

「『ええ！？』」

見ると念話でも実際の顔でも泣きそうである。よほど嬉しかったのか。

『おいおい泣くんじゃない東堂。　まだ油断は禁物だ。とりあえず念話は使えるようだし…聞こえているよな。聞こえたら返事しろ』

『八田さ…八田班長？』

『おお、よしよし上手く行ったな。これは互いの顔と名前を認識していれば術者同士、遠距離での通信が出来るものなんだ。』

どうやら訓練も無しに魔術の行使が出来るらしい。体が覚えていると言った方が正解か。

だが、便利と言うより自分の体に恐懼してしまう深雪。

八田班長によれば、他の４名も話しかけてはいるが、深雪の方が名前を知らないので接続できていないらしい。大急ぎで他の４名とも（初）顔合わせ。

括弧付きなのは深雪にとってはそうでも他の面子にしてみれば同じ釜の飯を食った同期な為である。

…この「釜」にも実は驚愕の事実がある、後述。

高須賀桜

班員。眼鏡を着用している。海軍は視力検査もあるらしい（深雪はそう思っている）のでこの時点で深雪の知る世界とはかなり違うの

かも知れない。…魔術がある時点で今更ではがあるが。

大山夏
班員。これと言った特徴無し…すこし言葉少な。
何でも口、歯並びでなにやら自分に不満があり、それで小さい頃から口数少なかった名残らしい。

すぐさま「どんな口なのか暴いてやろう」と考えたのは深雪らしいと言える。

山崎冬
班員。他の班員と比べると普通…だが話し上手らしい。気がつけば深雪と一番しゃべり、食べ物の好みなどの雑談に突入していた。本当にいつの間にか。

『よし、これで全員で念話出来るはずだ。では念話で姓名を点呼！』

『副班長　東堂恵理！』
『班員　高須賀桜！』
『…同じく　…大山夏』
『同じく　山崎冬です！宜しくお願いします…ってなんだか不思議な気分です。』

『…ええっと…斉藤深雪です…』

『シャキッとせんか！！！！』
『は、はいっ！！斉藤深雪です！』

『くすっ　何かいつも通りみたいですね』
『ですね副班長。　いつも通りの深雪です』
『…いつも通り、色々抜けてる…深雪』
『です。まぁでも良かったです。少ししたらいつも通りやれるって事ですよね？』

他の班員からの評価が若干？低いのに気がついた深雪。
恐る恐るではあるが、覚悟を聞いて質問する。

『…あのー…日頃の私ってどう思われてるんですか？』

たっぷり3秒は間が空いた。
班員達は目を合わせ、タイミングを計り、そして答える。

『『『『成績は良いんだけど……生活能力皆無にして要注意人物

（です）（ですねえ）『『『『『

『やっぱりかっ！！！！！』
深雪は心の中で「そこはまんまだったんかいっ！」と涙した。
それこそ号泣した。

タイムスリップに超常現象と何でもありなこの世界なら、そこは少しは改善されているのでは、と期待していたところあったのだが、どうもこの自体を現出した神か仏か何かはそこら辺は厳しいらしい。

聞くと昭和の斉藤深雪は料理当番に一切任命されていない。
班の食事は持ち回りで交代に作る事が多いのにも関わらず、である。

おそるおそる聞いてみると
「あれは…我らの苦い戦訓となった…」
我らが八田班長は念話を止めて本当に、
それこそアンドロメダを見るような遠い目をするし、

「…ええ…　噂は聞いていましたが…あれほどとは…」
副班長は思いだしたのか目をつぶり苦しそうにするわ

「まさか調理場が戦場になり、戦友の屍を拾う事になるとは思いもしませんでした…
陸軍の石原さんじゃないですが、ハルマゲドンとはああいうのを言うんでしょうね…」
冬は饒舌に悪い冗談としか思えないような話をするし。

「私の眼鏡、お陰で買い換える羽目になったんですよ?覚えてないんですか?」
桜は信じられない、あり得ないような事実を暴露する。

「……」
ちなみに夏は一言もしゃべらず震えていた。教科書に書いたような「ガクガクブルブル」で。ついでに顔面蒼白である。一体どれほどの恐怖があったのか……

「……何しでかしたんですか…私?」

「ウム。あれは何年か前…」班長が語り始める。

昭和の斉藤深雪の黒歴史が、今、明らかとなる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2001ba/

太平洋「魔術」戦争

2012年1月5日22時50分発行